

巻頭言

公立陶生病院

小川 智也

初心忘るべからず

「初心忘るべからず」ということわざ、ご存知かとは思いますが、この意味は「物事を始めたころの謙虚で真剣な気持ちを忘れてはならないこと」とあります。

理学療法を専門に学ぶ「学生」から理学療法士という「社会人」になった時の気持ち、覚えていらっしゃいますでしょうか。人それぞれいろんな思いがあったことでしょう。「患者さんのために役に立ちたい」「学会発表したい」「専門的な知識を吸収したい」など、前向きな気持ちを少なからずお持ちになっていたことと思います。「学生」から「社会人」になることで大きく変化すること、それは学生という立場とは少なからず「与えられている」ということです。例えば、レポート提出や試験となれば必然的に勉強しますし、提出期限も強いられます。ところが社会人になってみるとその環境は大きく変化します。日々の仕事に追われる忙しい環境の中では、時間だけがとても速く過ぎ、知らず知らずのうちに数ヶ月、数年と経ってしまい、いつの間にか理学療法士として刺激のない日々を送ることになりかねません。特に最近の動向として一人職場が増えていますが、そのような環境だとますます「井の中の蛙大海を知らず」という状況に陥り易いのは明白です。同じような環境に長くいると人というのは慣れていきます。慣れというのはとても恐ろしいことで、気づかないうちにそれでいいと間違った自信を持ってしまうことが多くあります。日々の仕事がこなし仕事にならないためにも、自ら行動をおこすことが大切です。待っていても誰も与えてはくれません。

現在、様々な研修会や勉強会が数多く開催されています。専門性の高いものもあれば、基礎的なこと、選択肢はたくさんあります。しかし、外に目が向いていなければ、そのこさえも気づかずにいるかもしれません。積極的に新しい刺激をどんどん吸収していこうという気持ちを持ち続けることが必要です。

また、社会の一員としての理学療法士を一般の人々に理解していただくことも大切なことです。地域での健康指導などの依頼を受けることや、愛知県士会が主催する風船バレーなどの公益事業に参加することが社会の中における理学療法士を実感できることと思います。皆さんは専門技術を研鑽していくことは当然のことながら、一般社会にも目を向けられるような幅の広い経験が必要です。色々な環境に触れる経験はより多くの方々と知り合えるきっかけとなり、いずれ自分の大きな財産となっていくでしょう。

物事を始めたころの謙虚で真剣な気持ちをもう一度思い出して、積極的に外に目を向けて欲しいと思います。限られた環境の中で日々の仕事のみ流されることなく、いつになっても、理学療法士として社会に出たころの気持ちを思い出し、是非、自ら新しい刺激を受けて幅の広い理学療法士になっていただくことを望んでおります。